Salamander in the circle

第十二章

機織り族の野望

峯村　明

Salamander in the circle

登場人物

スクナ・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える者
オモイカネ・・・・・　　〃　　スクナの甥
アマセオ・・・・・・世界の果ての島の王の兵士　シトリ族の者
チドリ・・・・・・・アマセオの妻
ハマツ・・・・・・・チドリの父
タマシギ・・・・・・ハマツの息子
ヤサカオ・・・・・・アマセオの旧友

これまでの主な登場人物

ダーヴェ・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・　　〃　　団員
パウル・・・・・・・ケストル王国・国王
ウルリク・・・・・・　　〃　　・第三王子
ヘンリク・・・・・・　　〃　　・ヘンリクの息子
ソルド・・・・・・・　　〃　　・警備隊長
バイスロイ・・・・・黄金門の皇帝の息子
パンテオラ・・・・・メッサナ市の総督
コモラ・・・・・・・メッサナ総督の顧問
バラム&バランケ・・双子のジャガー。パンテオラの部下
ホシナ・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長。マミヤの父
オマキ・・・・・・・ホシナの妻
ミツハ・・・・・・・メッサナからの亡命者。メルノの偽名
キト・コマ・・・・・ホシナ族の男たち
マミヤ・・・・・・・ホシナ族の娘
イリチヤ・・・・・・火の精霊
ヤスウ・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団員
レル・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長

ヘルガ・・・・・・・　　〃　　・王女
コタエ・・・・・・・世界の果ての島の王に仕える女官
サノヒコ・・・・・・島の王に仕える役人
ハイヤーン・・・・・ネウトラ評議会・本部科学者のリーダー
ティコ・・・・・・・　　〃　　・科学者
パルダリス・・・・・メッサナ市の総督家の一人。総督代理
メンドルプ・・・・・メッサナの化学者
ベネトナシュ・・・・死神

目次

機織り族の野望
188.
189.
190.
191.
192.
193.
194.
195.
196.
197.
198.
199.
201.
202.
203.
204.
205.
第十二章のあとがき
奥付

機織り族の野望

188.

「コタエ？　宮のどこかにいるんじゃないのか？」

「お見かけしないのでお尋ねしているのです」

「世話焼きの侍女がいるだろ」

「一部で配置換えがあったとか、新旧の出入りがあったとか、いくつか異動が重なってコタエさまの侍女だけ行方がつかめないのです」

「ふ……ん、それでなんでおれに聞くのだ」

「おふたりは仲良しでいらっしゃるから」

「なにを言ってる子どもじゃあるまいし。なにしろおれは住所不定、職業不詳、世間の評判は最低と、三拍子揃った怪しい中年男だ、そんなおれがだな、宮仕えしてるコタエがどうしてるか、知るわけないだろ」

「叔父上……」
　つ、とオモイカネは手をのべてきてスクナの手の甲に触れた。ひんやりと冷たい。そして切れ長の冴えた目でスクナの目をのぞき込んだ。
「叔父上。私はあなたの味方でいたい」

「な……ななななな」

「私を信じて。叔父上！」

189.

　ぱっと手を引っ込めたスクナである。身体の接触を断ち、合っていた目線を外すようにそっぽを向く。
「ったく！　おれに術をかけようとするとは！」

「叔父上、叔父上、そんなつもりはありませんでした。私はコタエさまがどこでどうされているのか知りたいだけなのです。ただそれだけです！」

「ふん。おれの味方でいたいだって？　なんのことだそれは」

　ふう、とオモイカネは息を吐いて頭を打ち振った。「私としたことが。久方ぶりに叔父上のお顔を見たら、組み立ててきた筋書きが全部吹っ飛んでしまって……」

「そういえば、よくお前さんの積み木の御殿を蹴飛ばして泣かせたっけなあ」

「はい。そのたびコタエさまが駆けつけてくださり……」

「わるものをやっつけてくれたってか？　ふん！　いや――てことは――おれがお前さんの筋書きを吹っ飛ばしたとなれば、そろそろコタエのやつが駆けつけて来そうなものではないか」

「いえ。コタエさまは来ません」

「――なんでそうきっぱり言う？」

「気配が感じられません。少なくとも……私の手の届く範囲にはおられない。叔父上、まさかコタエさまは――」

「ええい！　目ですがりつくな！　だいたい、お前さんともあろう者がなんだってそうコタエに拘る？　久しぶりにいい子いい子してもらいたいのか？」

「叔父上。さっきも言いました、なにがあっても私は叔父上の味方、そしてコタエさまの味方でいたい！　しかし、今コタエさまの行方がわからないとなると――味方になろうにもなれないのです！！」

「……なんだ。いったいなにがあった？」

190.

「さて――どこからお話してよいものやら――」

　オモイカネは本当に途方に暮れているようだった。
　彼は一を聴いて瞬時に万を悟るような人間である。黒曜石の細刃[さいじん]のようなその怜悧さは畏れと敬いと同時に（おれのような凡人には気後れをもおぼえさせる……）スクナはそう思う。

　そしてまたオモイカネは現政権の日読みを司る立場にいる。幼少のころを知っている血縁者の縁でも着こまなければ、おいそれと近づくことは不可能、というより、危険な人間でもあった。彼のつむぐ言葉と態度には、すべて、意味と力とがあるのだから。

（途方に暮れている、そう見えるだけかもしれん。油断するでないぞ。スクナ）

「そんな目で見ないでくださいませんか叔父上」

「もともとこんな優しい目だ」

「たまんないなあ……！　そうだ、ちょっと外を歩きませんか」

「今夜は新月。真っ暗だぜ」若干の皮肉を込めてスクナは言った。

＊

　少々湿度が高いが時おり通る風が肌に心地よい。かすかにせせらぎの音。水の匂い。

「こりゃ驚いたな」

「驚いていただいてなにより」

　新月の闇夜にほつほつと光がまたたいている。オモイカネの屋敷の裏手に流れる川の堤[つづみ]に立つふたりの姿は、乱舞する蛍の群れのなかでさながら天の川のなかの暗

黒星雲である。

191.

「さて――どこからお話してよいものやら――」

「なかなか話が進まんな」

「年サヤト……春……一日［ついたち］」

「……」

「その日、宮に来客があった、と記録にあります。異国からの客で人数は三。ネウトラ評議会からの出向で、渡来の目的は巨人族の定例調査である、と。定期的なものとはいえ、その期間が相当空くので宮中にて厳重な審査の上、入国を許可したそうです。まあ、怪しい者らではなかったということですが、彼らが来た時には、すでに我が国の巨人族は姿を消していたとか……。評議会調査団は目的を終えてすみやかに出国」

「ふーん……」

「出国したはずなのですが。しばらくのちに再び宮中で見かけたという者がいる。みな疲弊し、けが人もいたようだ、と。ねえ叔父上」

「はい？」

「同じ時期のコタエさまの動向、それ以降のコタエさまの動向が、さっぱり、記録され

ていないのです」

「おれにいわれてもなあ」

「彼らといっしょに行かれた、のですね」

「おーい。なんでそうなるんだ！？」

「叔父上のお顔にそう書いてあります」

「お前は闇夜でも人の顔が読めるのか？」

「まあ、お手のものですから」

192.

「そうですか――やはり――」

「おいおいおいおい」

「ネウトラ評議会の者らと共に――すると、目的は巨人族ですね――」

「あのなーその巨人族は帰ってきたんだろーもーいーじゃねーか！」

　オモイカネは闇の中でちらと視線をスクナに投げた。

「……では叔父上、お尋ねしますが、ややあって、宮中南御殿で朝餉用の食器を含むお膳六客分、及び食材とが紛失しております。はてさていずこへ持ち出されたものやら」

「朝メシが六人分て、細かいなおい」

「とかく勘定の不付き合いは目立つのですよ。どうせ持ち出すならコタエさまの東御殿からになればよろしかったのに」

「あ、なるほどーて、おっと、いやなに」

「まったくもう。なにを隠しましょうまさにその日、王ご自身が南御殿にお泊まりだったのです。そのため食材は最上級、食器類もとりわけおしゃれで上品なのを揃えてあったとか。南の厨房責任者は紛失の責任を追及され……」

「――まさか打ち首――」

「まさか。始末書を山ほど書かせてあげました。気の毒に」

「うむうむ、気の毒に」

「で――そのお膳は今どこに？」

「へるが姫がお気に召されて譲ってくれといわれるので、こんなのでよければ、はいどうぞと」

「それはいずこの姫君です？」

「え――」

「叔父上、事ここに至っては隠し立ては不毛。そう思いませんか。さ。きりきり白状なされませ――！」

　美しい日読みにずずいと詰め寄られ、スクナは不承不承すべてを白状した。

193.

「なんと――！　コタエさまは海のかなた、エロメウス王国へ――！？　なんと――なんということだ――！！」

「エロメウスちがう。エウメロス。国名を間違えるとは！　しかもお前さんともあろうものがお下劣な方へ。笑い話にもならん」

「おお私としたことが！　衝撃のあまりついうっかり！」

「ついうっかり間違えましたですむような国民性ではないぞ。ひじょうに律儀で潔癖な人々だ。国名をエロい方へうっかり間違えるとは許せんと、空を超えて海のかなたから攻めてくるかもしれん」

「……」

「あのなーオモイカネー、南御殿から朝餉を失敬したのはたしかにおれだが、コタエの渡航は、コタエに関しては、すべて王ご承知のことだからな」

「すると。知らなんだのは私だけ？」

「お前に知らせるとややこしいことになると思われたのだろ」

「どういう意味ですか。私はただコタエさまがどこにいらっしゃるか知りたかっただけなのに！」

「そういえばそんなこと言っとったな、コタエになんの用だ？」

「ああやっと本筋に入れる！　長い回り道だった！　叔父上、コタエさまは織物の名手でいらっしゃったでしょう！？」

「アレは器用にいろんなことに手を出していたからなあ、もしかしたらそうかもしれんが、織物？　それがどうしたのだ？」

「ひじょうに、特殊な織物を開発された」

「そういうことは、おれにはさっぱりだが」

「……鳥の、鳥の羽根を繊維状にし、織るのです。呪とともに」

*

　エウメロスのレルと共に出国した際のコタエの衣装はまさにその織物でできていた。コタエは万全の防備で旅立ったのだが、さすがのスクナもそこまでは知らなかった。

194.

　スクナはオウム返しに聞いた。「呪とともに？　鳥の羽根を？　織る？」

　ええ、とオモイカネはうなずく。「呪の方法は私が手ずから指南しました。この国第一の呪術者に指南してほしいと、コタエさまの方からそう……」

「それは――どういう呪だ！？」

「破邪の呪」

「邪な気を寄せ付けない？」

「そうです。破邪を念じながら鶴の羽根を織ったのです。それは見事なものでした。私は触らせてはもらえませんでしたが、光沢、しなやかさ、真珠貝のような色合い……」

「ひょっとして女もの？」

「はい。正后さまに贈られたのです。腹帯[ふくたい]として」

「……」

「じつは、正后さまには過去に二度ご懐妊され、二度……。ご本人も王もどれほど悲しまれたことか、お察しください。私も己の力不足を痛感させられたものでした」

「お前が頑張ってどうにかなるものなのか」

「ある程度は。しかしコタエさまから指摘を受けるまで、私は考えおよびませんでした。すなわち、二度のいたましい出来事は外からの干渉であると」

「――そうなのか」

「嫉妬、妬み、そういった感情は恐るべき力を持つのです」

「うーむ……」

「しかし、優れたお世継ぎが必要とされているのもまた事実。王に側室が何名もおられることは否定できません。たとえそれが諸刃の剣であったとしても」

「……」

「コタエさまは側室のおひとりであられながら、正后さまの無事なご出産を願って支援に徹せられたのですよ。それゆえ、高貴な鶴の羽根を使って胎児を守る方法を考え出されたのです」

　ふふん、とスクナは鼻を鳴らす。「おれは昔からアレの女離れしたところが気にいっていたのだ。人の目には変わった娘だと映っていたようだが」

　オモイカネは目を伏せて頭を下げた。

「鳥の羽根というのは呪をかけると非常に……呪の方向性、力を増幅するものらしいのです。使いようによっては胎児を守ることもできれば……おそらく逆のこともできるでしょう。コタエさまは先駆けであられましたが、近年、実用化した者がいる」

「……イヤな予感がしてきたぞ」

「ええ。織物の総元締め。シトリ一門に」

195.

「その織物を身に着けると霊力が高まるのです。空恐ろしいほど――心が高ぶって――自身で抑えが効かなくなる――」

「オモイカネ！　お前自分で身に着けてみたというのか！？」

「……王への献上の品だったのです。王が受け取り、衣桁(ハンガー)に広げてあるのを見まして、その風合いがあまりにも……似ていたので……」

「……かつてコタエが正后さまへ贈ったという腹帯に？」

「そう、そうです。その腹帯にとても似た風合いだったので、手を触れたいという欲求が抑えきれず、こう、そおっと……。次の瞬間、ああ、雷に打たれたらあんな感じでしょうか、体の中を何かが走り抜けたような感じがして……自分が自分でなくなった、頭の中に極彩の光が閃き、目で見ているのではないとわかる、光を感じる、自分だったものが開放されていく、強烈な……解放感！　あまりの恐ろしさに私は織物に触れていた左手を右の手でつかみ……すると……目の前がまっくらになって、しばらく気を失って倒れていたようです」

「本当か？　災難だったな」

「幸か不幸か、隣室におられた王が気づかれ、気が付いた時は女官から手当てを受けていました。とんだ醜態です。そしてふと衣桁をみるとくだんの衣がない。どうしたのかと尋ねると、女官が、『畳んで収納庫へもっていきました』という」

「女官はそれに触れてもなんともなかったと？」

「ええ。王にも聞いてみましたが、そういえば羽織ってみた時に心なしかちりちりする感じがしたと。触る者によって受け取り方が違うのでしょう。あれから二日たちますが私は未だにおかしな心持ちです。ちょっと説明しがたい、自分自身が分裂してしまって――そう――今まで知らなかった暗部が浮上してきて、それに伴って空恐ろしいほど心が高ぶる。自分で抑えられなくなる。ええ、今夜の私はちょっとおかしい……」

「おいおい、おれに襲いかかるんじゃないぞ」

　いつのまにかオモイカネは肩を上下させていた。懸命に呼吸を整えている。こんな甥をかつて見たことがなくてスクナはぞっとした。と、思う間もなく。いきなりオモイカネの両手がスクナの首に伸びた。

　スクナの方が二回りほど体が大きい。オモイカネは目いっぱい背伸びをしてスクナの首を絞めようととびかかって来たのである。

「おれに襲いかかるんじゃないって言ってるそばから。それともそれがお前の本心か！？」

　スクナは力むことなくふわりと体をひるがえし、手刀を相手の首に見舞った。

196.

「め、面目ない……」

　オモイカネは屋敷の自室で目を覚ました。

「いやなに。お前さんの気持ちはよくわかった」
「私なにをしましたか？」
「まーそのーおれに抱きついてきただけだ」
「えっ」
「うそだ。おれの首を絞めようとしたから気絶してもらった」
「どっちが本当なんですか！！」
「だーから、おれの首を絞めようとしたんだって、そっちが本当」
「――どちらにせよ、ありえません！　私としたことが――！」
「むぅ……お前を疑うわけじゃないが、例の献上品に触ったってやつの、余波か後遺症か」
「それ以外に考えられません！　なんだって私が叔父上の首を絞めねばならないのですか！！」
「わかってる。まあ落ち着け。それでその献上品というやつは今どこに？」
「王になにかあってはいけませんから、預かってきました。うちの奥の間に厳重な結界を張って保管してあります」
「大丈夫なのか」
「さあ。調べる必要もありますから。ああ。私がコタエさまの力をお借りしたいと思ったのはそのためなのです！！」

「あいにくだが……コタエは今手が離せん状況の中だ……」

「叔父上、コタエさまが他者に織物の指南をされた、というような話を聞いたことはございませんか」

「ございませんな。だいたいおれは出来が悪うて父親に見放されたような人間だぞ。かたやコタエは宮中にあがるほどの俊才で性格丸く、容姿にも恵まれている。おまえの方がよほど親しく付き合ってたんじゃないのか？」

　オモイカネは肩をすくめてため息をつき、首を振った。
「そうですか……。となると……シトリ一門の中に、独力で、あの特殊な織物を織る方法を見つけた者がいるということか……」

「それの元祖は腹帯だということだが……」

　ふたりは互いに上目遣いで相手を見た。

「シトリは何をしようとしてると思う？」

　オモイカネは険しい表情で首を振った。長い髪がはらりと額に崩れ、淡い灯火のもとでその美貌をさらに壮絶なものにしている。
「あの織物を身に着けた時の効果を知っての上で王に献上したのだとしたら……あるいは……知らずに献上したということも考えられますが、なにか、目的があってのことだとしたら、叔父上、どんなことが考えられますか？」

「だからそれを聴いとるんじゃっ！！　どうもお前とは波長が合わんようだなっ！！」

197.

　と、その時だった。屋敷内のどこかから、かたかた、かたかたとなんとも不吉な乾いた音。そして、しゅるり、とこれは衣擦れの音だ。
　スクナとオモイカネとは、はっと顔を上げて頭を巡らせた。次の瞬間。どん！！　と重い衝撃波。立ち上がりかけたふたりは部屋を転がり、仕切りの衝立をもろとも室外にまろび出ていた。

「何事か！？」
　オモイカネの鋭い問いかけに、押っ取り刀で廊下を駆ける警護の者は首を振ってひくく言葉を投げてきた。「直ちに見て参りますゆえ！！　どうぞそのまま！！」しかし警護者は、あっと立ちすくむ。
「どうした――」倒れこんでいるオモイカネの腕をつかんで引き起こしかけたスクナは、警護者の顔が向いている方向をみて絶句した。宙に、大きな影が浮いている――

　それは廊下のあちこちに置かれた灯火の淡い明かりに照らされて羽ばたくような動きをした。それは羽ばたいた。羽ばたきの猛烈な風圧に警護者は思わず両腕をあげて己が顔面を守ってよろめいた。

「あれは――！！」オモイカネは叫び、
「いかん！！」スクナは立ち上がろうとするオモイカネを押し倒した。倒れたふたりの上に吹き飛ばされてきた警護者の巨体が乗っかってきて、スクナは羽ばたく巨大な影を見失った。あちこちから家人のものらしい悲鳴があがる。

「いかん！　火を消せ！！」スクナは叫んだ。そこここに爆風に煽られた灯火が転がり、あっという間に広範囲に火の手が上がった。

　それは月のない深夜の出来事だったので、羽ばたく影がどこへ去ったものか、見た者はいなかった。なにしろ、館の突然の出火を消し止めるのに居合わせた者らは大わらわだったのである。

198.

　若君アマセオがひそかに実家に戻ってきたことを知る者は、ハマツのほかごく限られた者だけだった。ホシナの者たちに背中を押され、生まれて間もない赤子の顔を見にきたわけである。それも夜陰に紛れて。

「――なかなかりりしい顔をしておる――」寝た子を起こさぬよう、声を殺してつぶやくと、妻のチドリはそっとほほ笑んだ。

「一目みてあなたの面影を思い出しました。ほんにりりしい」

「私はこんな顔なのか？」

「ええ。そっくり」

　まんざらでもない顔で、アマセオは得意げに目を光らせた。「名を考えてきたぞ」

「まあ、どんな？」

　彼はひとりひとり、順番に指さした。「オオワシ。ハヤブサ。オオタカ。どうだ？」

「雄々しい名ですこと！」

「うむ。子が生まれたら鳥の名をつけるように、父君が言っていたのでな」

　それに――

（お子にはすぐにお名をつけて差し上げてくださいませ）

ホシナ族の娘が誰もいないところで黒い目を潤ませてそう言った。なんでも彼女はかつて生まれたばかりの子を失ったらしい。仔細はよくわからぬが、名前もろとも取り上げられてしまったのだという。年若い可憐な少女にしか見えなかったが、そんなことがあったのかとアマセオは胸のいたみを覚えた。正直なところ、名前にまで気が回らなかったのだが、山を下り、また上り、うっそうと木々の茂る険しい道を歩きながら懸命に頭をしぼった。ひょっとしたら――わが子のためにしてやれることは、これが最初で最後かもしれん、とそんな思いが頭をかすめるのだった。

道中、旧友のもとに立ち寄る。ヤサカオというその男は、八つの峰を一夜にして征服したと豪語する豪快さで、なだらかな日当たりのいい山麓に馬を放牧しているのである。

そこで、「一頭、譲ってくれぬか」と交渉した。「実は、子が生まれたので会いに行く」とこっそり打ち明けると、ヤサカオは手放しで喜んでくれた。

「ほかならぬおぬしのことだ、一番気に入ったのを連れていけ。礼などいらぬわ。おれからの祝いだ」

ヤサカオはすることも見た目も豪快だが、言葉使いや所作にはどこか雅なところがあった。「やまぶどうの酒もあるぞ。去年作ったやつだ」

しきりに勧められたが、これから険しい山を越えねばならないから、と断る。

「そうか、おれとの付き合いより妻と子を選ぶか。まあ、当たり前だな」

妻子に会いに行くのに弓矢はいらんだろう、預かってやる、というので、それもそうだと思い、武具を一式預け、身軽になった。

「この山麓一帯には危ないモノはおらん。なにしろ、おれが治めているからな。せいぜい、落馬せんようにな」

たしかにヤサカオにはそう言い放つだけの力があったから、アマセオは山に潜む獣にもモノノケにも煩わされることなく、無事に山を通り抜けることができた。

やがて故郷の地の懐かしいようなそうでもないような景色が見えてきた。

山の斜面には梶の木、そして平地は一面の桑。自生しているようにみえるが人の手が

入っている。その中に馬を入れるのはためらわれた。この季節、桑の葉を食んでいるヤママユ（野蚕）を驚かせてはならぬと、幼少時からさんざん言い聞かされてきた。そばで大声を出すのも厳禁というので、幼いアマセオはわざと奇声をあげて暴れまわったものだ。あげくこっぴどく叱られる。おれより虫が大事なのかとよけいふてくされて暴れる。叱られる。周囲のものが敵だらけのような、悪循環の日々が苦々しく甦ってくるのだけれども、わが子を持ったという自覚は、馬の汗を拭いて労りの言葉をかけ、桑畑の外のここで待っていろと言い聞かせるのだった。

*

チドリと赤子らのために設えらえた離れ家の一室。ホトトギスの夜鳴きに耳を預けて、アマセオは妻子の傍らで添い寝をする。

その朝もまだ明けきらぬころ。外からアマセオを呼ばわる低い男の声。

199.

アマセオの父には兄弟姉妹が幾人もいて、彼らの家族がそののどかで平らかな土地に散らばって暮らしていた。アマセオを呼ばわっていたのはそんな親族のひとり。

（若君。アマセオさま。お久しゅうございます）
（タマシギか）
（は）

　タマシギはチドリの兄である。

（アマセオさまがお帰りであると、父から聞かされまして）
（……そうか）
（はい）

　義兄弟の久方の顔合わせでも話が弾まない。タマシギとチドリ兄妹の父、ハマツと話が弾まなかったのと同じ理由からではある。

（父と相談しました。アマセオさま、チドリが三つ子を生んだことを知るのは産婆とその娘、ふたりのみ。このふたりにはよくよく言い聞かせ、固く口止めしてございます。チドリが生んだのはひとりです。アマセオさま、どうかふたりを連れて、お匿いくださいませぬか――）

（タマシギ、それは――）

（チドリの子は父の孫。私の甥子。闇に葬られるのをみすみす指をくわえて見ているわけには、まいりません――）
　タマシギは低い声で激しく言ってうなだれた。

　闇に葬られる。やはりそうなのか。アマセオは改めてそう思う。

（タマシギ、そなたは私より二十も年長だ。私が生まれた時のことを知っているのではないか？）

　タマシギは、はた、と面をあげた。そしてしばらくアマセオと目を合わせていたが、再びうなだれてしまった。

（そうなのか。やはり）

（お許しください……若君……）

（責めてはおらぬ。ただ知りたかっただけだ。そうか……。ひとつ、疑問に思っていることがあるのだが）

　タマシギはおそるおそる面をあげた。

（私は、最初からアマセオという名なのか？）

（なぜそのような――）

（一族の者にはおおかた鳥の名がついてるのに、私は違う。なにかわけがあるのではないかと思うのだ）

　タマシギは目をしばたたいて口ごもった。アマセオはそれを見逃さない。（知っているのだな！？　たのむ、話してくれ！！）

（……若君は、覚えておいででしょうか。幼い日にキジを射って捕らえてまいられた）

（それは覚えてる。父に褒めてもらおうと思い、矢を抜かずに持ち帰った――）

（一族にとっていかなる鳥も守り神に等しい、神聖なもの。急所を射抜かれたキジをごらんになって、父君はどれほど驚かれたことか）

（――ああ――）

（その時に若君は鳥の名を取り上げられたのでございます……）

200.

この世に共に生まれた兄弟を、己の本来の名を、そして今、わが子を。取り上げられる。すべて己の意の届かぬところで。おそらく、親族の手によって。

一族の中に三つ子が生まれることは時の王への恭順に外れるという。
とはいえ、出生とは人の意の及ぶところではない。人は様々な理由や手段で世を去るが、生まれ出る時も方法も選ぶことはできぬ。出生に逆臣の意など、微塵もありえない。そのことを公に主張すれば済む話ではないのか？　それもせずに、親族の手によって、間引く、とは。アマセオが己にもう二人の兄弟が存在したことを知った時には、そのことはすでに一族のうちで大きなタブーと化していた。母親は責められたのか自責からか、病んで早々に亡くなった。アマセオは父に顧みられることもなく、周囲の人間関係から浮き上がって成長した。そして今また一族の圧力がアマセオ自身だけでなく、妻と子らに及ぼうとしている――周囲に異を唱えようにも、彼自身に人望も影響力もないときている――

彼はその体内になにかが灯るのを感じた。憤りとも悲しみともつかないものが腹の底から湧き上がってきて、体内に渦巻き、核を作るのを感じた。それは、妻子を守ることができるのは己だけだという自覚だった。

先刻のタマシギの言葉を反芻する。チドリと赤子ひとりは彼女の実家の者たちが確実に守ってくれるだろう。問題は赤子ふたりだ。タマシギは、連れて行ってくれ、という

が、男一人で生まれたばかりの首も座らない赤子をいったいどうしろというのだ。

　あれこれ思い悩むアマセオの様子を気遣わしげにうかがいながらタマシギがそろそろと声をかけた。（ときに……）

（む？）

（先だって、若君がチドリに言づけた髪束のことなのですが……）

（ああ、ハマツに託したあれか？　あれがどうかしたのか？）

（実は少々まずいことに）

（どういうことだ、なにがまずかったのだ）妻への言づけのなにがまずいのか。意味がわからずアマセオは顔に不快の表情をのぼらせた。

（髪を束ねた布のことです。覚えがおありですか）

　言われてアマセオはあの晩のことを思い返した。出産の知らせに来たハマツを先に帰らせるので、知らせを受け取ったしるしを持たせようと、自分の髪を一房切って布に包んだのだった。ホシナ族のミツハが気をきかせて持ってきた布だ。あれがどうかしたのか。

（ひじょうに……珍しい……いえ、織物全般を任せられた我らシトリの者でも希に見る、非常に質の高い布だったのです）

　ミツハが天幕の隅から持ってきたそれは、作業着を修繕するための端切れだった。ホシナ族の人々は鋭い黒曜石を扱うため、たいへん目の詰んだ作業着を身に着けていた。

それも長年に渡って修繕に修繕を重ねた、年季の入ったものだ。布地の質の良し悪しなどわかろうはずがなかった。

（あれが！？　あんなものがなぜ問題になる！？）

（シトリのものではないからです）

201.

（シトリのものでないから――なんだというのだ）声に、不快の念が滲む。

（若君は疑われているのです）

（――どんな疑いだ）

（つまり……シトリのそとに機織りをお持ちなのではないかということ）

（……だとしたら！？）

（危険だということがおわかりになりませぬか！！）

（ばかばかしい）アマセオは吐き捨てた。

　たしかにシトリの一族は、原材料の調達、織機の開発、それらの取り扱い指導など、機織り全般を現王権から一任された、公共のための企業体を成している。そう、公共の

ためのものなのだ。織機など一般の農作業に携わる人々が使っている。機械ゆえに故障も不調もあるが、ちょっと手先の器用な者などは自分で調整修理したり、あるいは改良してしまうこともある。全国津々浦々の織機すべてをシトリが把握しているわけではないし、一般人が自分らの衣服のために使うのだから、むしろ自分らで改良してもらってかまわないではないか。アマセオは家業に関する乏しい知識をかき集めてそのような考えをもつに至っていた。

（それとも、私は間違ってるのか。タマシギ）

（まさか若君がそのようなことをお考えとは……よろしいですか、シトリが得た織物に関する権利は守らねばなりません。なにものに替えてもです！）

（知識や技術は誰にもやらん、と？）

（その通り）

　アマセオは思った。ホシナ族の人々もそう考えているのだろうか、と。あのおおらかな人たちも、知識や技術は誰にも教えないと考えるのだろうか。

202.

（私はシトリを出た者だ。これからのち、一門がどういう道を進もうが、私の知るところではない……）
　アマセオはなにげに失望感を覚えて、虚ろな気分でつぶやいた。

（話を逸らさないでいただきたい、若君。髪束を包んだあの布、あれはいったいどうされたのです！？）

（……もらいものだ）

（ですから！　どこで！　誰に！）

　虚ろな目でアマセオはタマシギを見る。ホシナ族の仕事場は王の直轄地で、一般の者には禁足地である。彼らの絹の作業着も支給されたものだろう。おそらく宮中で作られたものだ。しかしそんなことを教えるわけにはいかない。
　そしてふと思い出す。ホシナ族のもとまで使いにやって来たのはハマツ。タマシギはハマツからは何も聞いていないということなのか。むろん、ハマツは厳重な審査を経てホシナの中枢まで入って出て行ったのだから、強い禁忌を冒したという自覚があって口をつぐんでいるのだろう。言ってみれば、ホシナ族の居住地は人外の地なのだ。

（タマシギ）

（――はい）

（そなたが知らなくともよいことだ）
　そう言ったとたん、むっ、と嫌な波動に襲われるのをアマセオは感じた。不快感や警戒感よりも、おや、と彼は興味をひかれた。いったいタマシギは何をしたいのだ？

　タマシギはそろそろと立ち上がり、静かに言った。（ご同道を。若君）

203.

　夜更けの真っ暗な中をタマシギは先にたってさくさくと足早に歩いていく。今宵は新月、星だけが夜空に瞬いている。星明りに桑畑のあちこちに平屋の建物が見える。養蚕の研究施設であり、試験場だ。そのひとつの建物の前で立ち止まったタマシギは内外を隔てる戸の前でしばらく何か考えているようだった。やがておもむろに手をあげて戸を押し開き、アマセオを振り返って中へと誘った。

　不思議な匂いがする。梶の木の樹皮や桑などの植物の匂いではない。むしろ嗅ぎ慣れた――

「これは――」

　タマシギが注意深く掲げた灯明の灯りの中に見えたのは糸車。糸がかかっている。ひどく細い。まるで……

「何だと思われますか」

「クモの巣か」

　タマシギは声をたてて笑った。

「ウケるとは思わなんだ。何なんだいったい。蚕の糸ではなさそうだが」

「これはウサギの毛ですよ」

「ウサギ！？」

「そっちはヤギの毛です」

「獣毛――？」

「驚くことはありますまい。絹だってイモムシの繭から作るのですから。そうですね、いずれ、クモの糸というのも考えてみますか」

　タマシギから紡ぎ終えたウサギの毛の糸束を手渡され、アマセオは思わず感嘆の声をあげる。驚くほど軽く、手触りがいい。しろうとの手にも絹糸とは明らかに違う。いつまでも触感を味わっていたい、夢のような柔らかさだ。

「ウサギの毛もヤギの毛もひじょうに扱いが難しい。とにかく一本一本が細くて短いもんですからね。そこへいくと獣毛とはちょっと違いますが鳥の羽根というのは扱いやすい。すでに製品化しています」

　え、とアマセオは引っかかった。「そなた、先刻言わなかったか。シトリの一族にとっていかなる鳥も守り神に等しい、神聖なものだと。その羽根を織物にするのは――問題ないのか？」

　タマシギは手を胸の前へ持って行って祈る所作をした。「一族の繁栄のために羽根をいただくのに、なんの問題がありましょうか」

「そういうものなのか？　で、羽根で織ったという織物はどなたが使うのか？」

「むろん。王ご自身が」

「王に差し上げた――？　しかし王の召し物はすべて宮中で作られるのではないのか？」

「基本的には。が、若君、わが一族が織物の権利を得てまだ日が浅い。一日も早く盤石なものにしなければなりません。それには、機会があれば我々の技術の高さを訴えることもしなければなりません。実際に王ご自身に使っていただくこと、これ以上の手がありましょうか！」

タマシギは薄明かりの中、熱心にという以上に、目に強い意志をみなぎらせて挑むようにアマセオを見た。

204.

ハマツは眠れぬ夜を過ごすうち、寝室の戸を開けて風にあたっていた。アマセオが妻子に会いに来ている。それは人のいいハマツを懊悩させた。

ハマツの妹、コサギはアマセオの乳母だった。
本家の若君の乳母とはなんと光栄なことだろう。コサギ自身も女児を生んでいた。待望の女児だった。若君とは乳兄弟となる。いずれはふたりが夫婦になる可能性も無きにしもあらずだ。幾重もの喜びに浮きたっていたのもつかの間、コサギの子は亡くなってしまった。悲しむいとまもなく、若君の養育にあたるコサギだった。

時を同じくして、ハマツはアマセオの兄弟たちの処分を仰せつかった。アマセオから引き離し、人の目に触れぬよう、殺すなり捨てるなり、いかような方法でも構わぬという。主家の主は跡継ぎが三つ子だったことに動転し、『処分』に関して具体的な指示を

しなかった。

　なんとも気の重い役を受けてしまったハマツは、三つ子のうちの二人をひそかに引き取り、途方に暮れるうちに思いもよらぬことに気がついた。三つ子は全員男ではなかったのである。つまりハマツの引き取って来た二人のうち、一人は女児だったのだ。

　それは、コサギの子が亡くなったと表ざたになる前のこと。この女児を亡くなった子の代わりに――　処分するのは一人でたくさんだ――

　こうして、アマセオは自分の妹と知らずに乳兄弟のチドリと成長することになる。二人は気が合った。兄と妹なのだから当然と言えば当然だった。
　そうこうするうちコサギは亡くなり、ハマツはチドリを自分の養女にする。こうしてアマセオとチドリが実は兄妹だと知るのはハマツだけになったのである。

　一族の中で主家の跡取りとの婚姻となれば縁談などいくらでもありそうなものだが、アマセオの場合、おおかたの家が躊躇した。彼の生まれつきの性質が、どこか一族の者と違うからだった。そのうえ、生みの母親も乳母も早々に世を去っている。養育者も安定せず、そういった環境で育ったことも一因だったのだろう。結局、アマセオが気を許せるのは乳兄弟のチドリだけだった。

　養父のハマツは二人の仲の破綻をこっそり願い、仲を裂くべく暗躍もした。が、願いは通じることなく、二人はやがて正式に夫婦となり、子を成した。その子がまたもや三つ子とはいったいどういう因縁か。もしや――アマセオの三つ子の兄弟の一人を処分し、兄と妹とが通じてしまったこと、そこに起因するのか――それは祟りか。

　ハマツが祝う気になれないどころか、罪悪感にまみれているのはそういう訳だったのである。

205.

　アマセオがタマシギと睨み合い、ハマツが懊悩に身を焦がしていた、その日の明け方。主家の離れで騒ぎが起こった。離れの庭先、アマセオがタマシギと挨拶を交わしたあの庭先に、巨大な鳥のようなモノが舞い降りたのである。

　物音に気づいたチドリが、庭へ出て行ったアマセオを心配して寝床をはなれ、戸を開けた。チドリの魂ぎる悲鳴。驚いた使用人たちが寝間着姿のまま駆けつけてくる。

　そこには――

　布団ごと赤子をかぎ爪で鷲づかみにした鳥のようなモノが宙に浮いていた。チドリは狂乱して髪を振り乱し、「返して！！」と金切り声で叫んでいる。それは人々をぞっと氷漬かせる光景だった。鳥のようなモノには頭部がなかった。しかしどう見ても鳥だった。それがシトリー族の子を今まさにさらおうとしていた。
　チドリは両手をもみしぼって叫んだ。「アマセオさま――！！　助けて――！！」

　その時、蹄の音も荒々しく、馬が庭に駆けこんできた。アマセオは巨鳥を弓矢で射るべく、手を背に回してはたと気がついて舌打ちした。武具一式は友人ヤサカオのところへ置いてきてしまった。まさか、こんなことになろうとは！

　頭のない巨鳥のシルエットが雲ひとつない明け方の空にくっきりと見えている。それはまさにモノノケだった。
　巨鳥は大きく羽ばたいた。使用人たちが携えていた松明が吹っ飛び、灯明の火が大きくあおられ、離れ家はあっという間に燃え上がった。

「チドリ！！」アマセオは妻の名を呼んだ。「子は私が取り返す！！　必ず！！」

　馬は前足を高く持ち上げて一声いななき、狭い庭を駆けだしていく。巨鳥を馬で追おうというのだった。

第十二章『機織り族の野望』

第十三章へ続く

第十二章のあとがき

アマセオの手がかりの少ないこと！
わかってることと言えば、彼がカンミムスビの玄孫で、時の政権に従わず、星神と呼ばれ、シトリ神アメハヅチに討たれたということ。不可解なのは、悪神アマセオの属するシトリ一門が取りつぶされることなく、織物の祖伸として残ったことです。おそらくアマセオを討ったことと関係があるのでしょう。

彼らの物語を覗いてみたいと思う。Salamander　in　の道半ばでなぜこんなところにいるのかと言えば、彼らの物語は互いに繋がっていると感じるからです。

アマセオとシトリ神の考察等はブログで行っていますのでよかったらご覧ください。こちらのあとがきはできるだけ簡潔にしたいと思います（笑）

2022年10月28日　記

奥付

Salamander in the circle
　第十二章　機織り族の野望

2022年10月31日 初版発行
著者　　峯村　明　E-mail
　　ブログ　世界の果ての島より
表紙素材　「月とサカナ」
　　「イラストAC]
　　「素材ラボ」
制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社